

年頭所感

日本小児科学会 会長 高橋 孝雄



小児科学の道を選んで37年、今改めて「小児科医になってよかった」とつくづく思います。それは、自然科学としての小児医学の進歩と、社会学としての小児医療・保健の進化によるところも大きいと感じます。

自然科学としての小児科学は、人のからだが生み出される過程（成長）とそこに機能が宿る過程（発達）を科学し、それらの異常の原因を突き止め、治療法を開発、治療を行います。そのような小児科学の使命を特徴づけているのが、遺伝の力を信じ、その力を子どもたちのために活用しようという意気込みではないでしょうか。

社会科学としての小児科学は、子どもたちが、たとえそれが生まれつきのものであったとしても、環境要因によるものであったとしても、困難を克服し人として幸せな人生を手に入れることを最終目標としています。そのような小児科学の使命を特徴づけているのが、すべての子どもたちに寄り添い、代弁者として子どもたちのために力を尽くそうという意気込みではないでしょうか。

さて、ひとの一生において、遺伝の力と環境の力は、協同して健康な心とからだを作り、維持しています。胎児期には、遺伝子が決めた非常に緻密で堅牢なシナリオに沿って、ほとんど同じ生物学的なステップを踏んで体が形作られていきます。遺伝的素因は生まれた後も強く作用し続けるため、たとえ劣悪な環境に遭遇したとしても、あらかじめ決められたストーリーから大きく逸脱することなく子どもたちは成長、発達を遂げようとします。遺伝の力とは、容易には変わらないことによって、子どもの成長や発達を底から支える力とも言えるのではないのでしょうか。

子宮内環境、育児環境、教育環境、社会環境など、人の一生を支える環境は多数あります。貧困や虐待など重大な問題を抱えた負の環境要因はあとを絶ちません。そのような状況が長期間続くことによって子どもたちの健全な成長と発達が危機に瀕することは、小児科医であればだれもが経験することです。しかし一方、温かい母性と強い父性に守られた豊かな育児環境は子どもたちの成長・発達にとって大きな追い風となります。環境の力とは、変化に富み、流動的であることによって、子どもの成長や発達を包み込むように促す力とも言えるのではないのでしょうか。

理念法である成育基本法がいよいよ実行に移されるのが2020年です。子どもたちを幸せに導くための“道筋”作りが始まります。自然科学と社会科学を両輪として、遺伝の力を信じ、環境の力を利して、子どもたちの幸福のために邁進し続けていきたいと思います。今、そのための“軌道”を手に入れたと感じております。「小児科医になってよかった」とつくづく思います。